「奈良民話祭り」２０２２年夏オンライン大会

酒井董美（ただよし）

標記の会は9月3日（土）午後1時半から2時間余りかけて、約40名参加のZOOMを通して行われた。主宰は「奈良の民話を語りつぐ会」（2009年結成、愛称・ナーミン＝名誉代表・竹原威滋（たけしげ）奈良教育大学名誉教授、代表・小西雅子氏）。コロナ禍の今回は一個所に集まることを避けたオンラインの大会だったが、このやり方のよさは、遠くは岩手県遠野市、千葉県、三重県、鳥取県日野町、島根県出雲市（いずれも民話の会）からの参加も可能だったことである。このように述べる筆者もその一人であった。

大会は竹原威滋名誉代表の挨拶から始まったが、全体は2部に分けられ、それぞれ11項目の出し物があった。1部は奈良市や橿原（かしはら）市の奈良県北部、2部は同県南部の山間部の題材に分けて、プログラムが組まれていた。いずれも初めに該当する民話地図や関連地の写真を提示して、視聴者の視覚に訴えるように準備されていたのは、オンライン大会の進め方として、他のグループにも参考になるものと思われた。

「奈良民話祭り」参加者記念撮影（奈良・小西雅子氏提供）

まだコロナ禍の見られなかった以前の、対面形式による開催当時の大会写真も冒頭で披露され、なるほど前はこんな多彩な形だったのかと、大会初参加の筆者たちにも、ナーミンの平素の活動ぶりがよく理解されるように配慮されていた。

内容を1、2部併せて述べておくと、語り（伝説、昔話）が13、手遊びと紙芝居が同数の4、わらべ歌が1ということになり、1、2部ともほぼ均等にプログラムが組まれていた。主宰団体であるナーミンのみなさんも、各人が自宅で参加したり、パソコンのないメンバーは、数名ずつ近くの施設に集まり、そこのパソコンを借用して参加した関係もあり、プログラムの順を急に変えざるを得ない事情が生じたりしたが、司会担当の小西雅子代表が臨機応変に指示を発して、該当者もそれに従い、結果的にはスムーズに終わったのは、歴史を持ち、豊富な経験を重ねた本会らしいと敬意を表したところであった。

会終了後、外部から参加した方々の感想を挙げておくと、関西地方独特のやわらかい感じの奈良弁への魅力の指摘や、語り手の方々は、いずれも年期が入っているだけに、さすがだと思いながら聴かせていただいたとか、バラエティあふれる豊富な内容が大いに参考になった。見事な司会ぶりに感心したなどと好評だった。

筆者の感想も似たものであるが、コロナ禍の中で連絡、打ち合わせなど運営に大変だったに違いないと、蔭の苦労を察しながら、それにしてもオンライン会の持ち方に、見事に一石を投じた大会だったと、大いに感心しながら視聴させていただいたのである。